



APPLIQUE88

MIUMIU AND BALLARD

ミュウミュウのバッグも、その中に放り込んだバラードの文庫本も、それを取り出す手の深紅のネイルも、ずっと同じページに挟んでいる黒の葉も。

何をとっても誰かとお揃いで。

でもこうしてたくさんの同世代が同じようなテーブルについている薄暗いカフェの中から、彼は私を見つけ出して、

「待った？」

と声を掛けてくれる。

私が、

「全然」

と返すのは、本当に待っていないからではなく、まだ夜は長いから、大目に見ているのだ。

実際には私は30分以上ここに座ってバラードを読んでいる。電池の持ちが悪いことで評判のスマートフォンにしてからは、私は暇な時間を文庫本で潰すことにしているのだ。

彼は黒いコートを脱ぎ、

「何聴いてたの？」

と尋ねながら私の向かいの座席に座る。

そう尋ねられて、私はテーブルの上に置いたままのiPodに気が付く。

「あー・・・、ラジオ」

「ふーん」

本当はボカロなんだけれど、彼にその話はしない。

(新人のPなんだけれどもね、史上最速でミリオン達成しそうな勢いなものよ今。あっ、史上っていうのはオリk.....そうそう、その動画サイト上での歴史) と言って彼は興味を持つだろうか。

興味っていうのはつまり、"ボカロ"にではなく、"それを語る私"に。

「勉強は？ちゃんとしてる？」

「うん一応」

「一応かー。まあ君いつも成績いいもんね。勉強してるようには見えないけど」

「うん」

「お姉ちゃんは？元気？」

「あーうんまあ」

「ああ、そうか」

会話が途切れたら話そうと思っていたが、こんなにも早く機会が訪れるとは。

そういえば……、

「ライ麦読んだ？」

「えっ？ 何それ」

ウェイトレスがホットコーヒーを持ってくる。私は、彼女が立ち去るのを待ってから話し出す。

「本だよ、本、小説。この前渡したじゃん？」

「あー、読んでない……」

と彼が言ったと同時に、彼のケータイが鳴る。

「あっ、ごめん」

と言って彼は席を立ち、どこかに向かいながら電話に出る。

また一人になった私は、iPodと、相変わらずのページに葉を挟んだままのバラードをバッグにしまい、冷めたカプチーノだけになったテーブルに肘をついてスマートフォンのロックを人差し指で解除する。

Twitterを開くと、TLに、

「RT @applique88 明日の予定は未定。誰か遊ぼうよー><」

というpostが目に入る。RTされて流れてきたのだ。誰がRTしたのだ、こんなもの。これをpostした人間は、本当に誰でもいいのか？

私はなんとなくそのpostに対するレスポンスは着ているのか調べてみる。反応はないようだ。

私は帰る仕度をする。

ここまで電話が長いつてことは、たぶんまた「ごめん」とか言って立ち去るつもりなのだ、彼は。

結果から言うと、その通りだった。

ただ、いつもと違ったことが一つだけあって、それは面と向かってではなく電話越しに言われたことだった。

「ごめんごめん」
と謝る彼に、
「はいはい」

「でも勝手に帰るとかヒドくない？」
誰かさんから掛かってきた通話が終わって、席に戻ると空になっている向かいの席を見る彼の顔を思い浮かべる。
「そうだね、ごめん」
と、てきとうに返事していると、つい、「別に私じゃなかったっていいんでしょ？」と口走りそうになる。けれども私にそんな勇気があるはずもなく、
「また時間ある時に会おうね」
と言って電話を切った。

カフェを出て、天井の低い地下街を歩く。床のタイルにひかれた黄色い線が、改札口まで導いてくれる。行先を考えなくて済むぶん、頭の中は余計なことばかり浮かんでくる。

彼にライ麦を読ませたかったのは、昔好きだった男の子との約束を再現させるため。
中学3年の時、私が教室の隅で新訳のライ麦を読んでいるとき、彼は旧訳のライ麦を読んで

いた。それに気づいた彼が、
「読んだら交換しよっか」
とってくれたのだ。

けれど、私がライ麦を読み終えた頃には、彼はその約束をすっかり忘れて次の本を読んでいた。

私は、叶わなかった約束の形だけをそっくりそのままコピペして違う誰かを手を繋ぎたかっただけ。

古い恋の手垢がついた約束を自分に当てはめられた事を知ったら、きっと彼は怒るだろうな。きっと誰でも怒るだろうな。

帰りの電車を待つ薄暗いプラットフォームで、さっきのTwitterのpostを思い出す。
「明日の予定は未定。誰か遊ぼうよー><」
誰だかよく分かんない人が定義する”誰か”に、私は該当するのかなあ。
もしかして、彼の”誰か”に私は該当してしまっているのかなあ。

電車が滑りこんできて、それに乗り込む。座れそうにないので、扉近くに立っていることにした。

走り出した電車の窓から小さく見えたのは、今となってはランドマークとしてしか機能していない死んだ電波塔。

この都市を象徴するものは、もうその“死んだ電波塔”しかなくて、それを見上げるともうすぐ世界中がこの都市のようになるような気がした。

この国には何でもあるが、何でもある都市なんて、世界中にいくらでもある。

電車が最初に停まった駅は私の降りたことのない駅だけれど、その駅から電車に乗り込んできた高校生の女の子が手に持っていたgalaxxyのショップ袋――
それ、私も持っているよ。

君と私が出会ったら、私たちは二人の共通点を探すのかな。それとも似てないところを探すの

かな。

もうすぐ世界中が私みたいになる。

特徴的でありながらも匿名的な車掌の声が、次の駅の名前を告げる。

こんばんわ、あっぷりけ88といたします。

読んでくれてありがとうございます。

い、いかがだったでしょうか・・・。

どうかあたたかい眼で・・・笑。

お気に入りや読者登録してくだされば超嬉しいです。マンモス
うれp・・・うん・・・。

もし感想や意見、誹謗中傷があればパブーのコメント欄にくだ
さいな。お返事させていただきます。

外部連携（Twitter、Facebookなどなど）でコメントくださ
れば、こっそり読んでニヤニヤしたいと思ってます(*´ω`*)

では、またね(´・ω・`)/